
吸血鬼の住む町

比恋乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼の住む町

【Nコード】

N9531I

【作者名】

比恋乃

【あらすじ】

血を吸わない吸血鬼、ハロルド・オールコックと、その周囲の人々の物語。

00 登場人物（前書き）

軽く適当に紹介しているだけなので、実際の数字にはこだわらず、年齢差や身長差の面で楽しんでください。

00 登場人物

ハロルド・オールコック

性別：男 生きている年数：210年程度 人間換算：40歳ぐらい
身長：180以上 黒髪で目の色も黒

普段はウェルナー国最北の町アツシユローズに住む吸血鬼。

寒くなつてくるとトーン（中央）に移住する。

なかなかの苦勞性で、規則正しい生活を目指すものの、度々友人に邪魔をされる。

血を吸わず、トマトジュースで生きている。

アルフ

性別：男 生きている年数：2年程度 見た目年齢：10歳ぐらい
身長：130はある 目も髪も茶色で目の方が濃い色

ハロルドの従者でコウモリ。

もちろんマスター大好きで、主食はマスターの血。

最近イアンという友達ができて嬉しい。

リック・フィールド

性別：男 生きている年数：60年程度 人間換算：30歳ぐらい
身長：180ないぐらい 飴色の髪と目

ハロルドやバース一家の友人で、吸血鬼ハンター。

ハロルド宅におじゃまするときは、アルフと一緒に料理をしたりする。

適当でおおざっぱで友人想い。

血は吸わないし、トマトも嫌い。

ライナス・バース

性別：男 生きている年数：200年程度 人間換算：37歳ぐらい
身長：180以上 髪色は濃いめの赤 目は灰色
東のペール地方、バイオレットに住む吸血鬼。

ハロルドやリックなどの友人を大切にする。

髪色のように陽気でお調子者で親ばか。

意外と義理堅い一面もある。

ドロシー・バース

性別：女 生きている年数：180年程度 人間換算：35歳と少し
身長：170ちよい 髪色は朱より少し濃い赤 目は鈍色

幼少時に人間から吸血鬼へ。

しっかり者だが、内緒事をぼろつとしゃべってしまうことも

アーモンドの花が好き。

イアン・バース

性別：男 生きている年数：8年程度 人間換算：8歳
身長：130あるはず 髪色は父と同じで目は鈍色

まだ血を吸いすぎると酔っってしまうバース家の息子。

アルフと友達になれてかなり嬉しい。

父よりもハロルドを憧れの対象にしている。

ソフィア・ブロウ

性別：女 生きている年数：30年 人間換算：22歳
身長：166ぐらい 金に近い茶髪で目は深い緑

絵を描きながら色んなところを旅している吸血鬼。

髪の毛はふわふわで、性格もふわふわしたところがある。

クロード・サブレ

性別：男 年齢：18歳ぐらい

身長：170はない 黒い髪に青緑の目

家族を吸血鬼に殺された人間。

復讐のためにリックの弟子となる。

基本的に敬語は使わない。

アルベルト

性別：男 生きている年数：20年程度 人間換算：16歳ぐらい

身長：160ぐらい チョコレート色の髪に黒い目

生まれたときから吸血鬼の少年で、ハロルドの友人。

ニンニクが好物。

リリー

性別：女 年齢：14歳

身長：150ぐらい 栗色の髪の毛に灰色の目

アルベルトの恋人で人間の女の子。

短い髪をいつも二つに結んでいる。

01 ハロルド・オールコックという男

西ヨーロッパに位置するウエルナー国。その国の北方、ブライト地方にあるドがつくほどの田舎に、アッシュローズという町がある。これと言った特徴もないような普通の田舎町だが、一つだけ他と違うものがあつた。それが、吸血鬼が住むという屋敷で、アッシュローズ唯一の観光名所だ。かつて、名のある貴族が住んでいたそこは、上手い具合に荒れ果て、観光名所として十分な役割を果たしている。そして、そこに住む吸血鬼の名は、ハロルド・オールコック。この町に住んでいて、彼の名を知らない人はいない。

ここ、農業地域であるアッシュローズも秋を迎えると、今まで以上に忙しい日々が続く。収穫を急ぐ傍ら、それを過ぎれば収穫祭も待っている。嬉しい悲鳴だ。そんな時期、一番活躍するのが、彼だ。「おい、それが終わったらこつちも手伝ってくれ！」
「分かった、少し待ってくれ」

いっばいに詰め込まれた小麦袋をいくつも、軽々と持ち運ぶ。
「ほんと、ハロルドは働き者だね」
どこからか、そんな声が聞こえる。観光名所の屋敷に住んでいて、町一番の働き者で、吸血鬼で、それがハロルド・オールコックなのだ。

「みんなー、お昼にするよー」
炊き出し班の音が小麦畑に響いた。アッシュローズは小さな町なので、全ての農家で一齐に収穫をするのだ。

「もうあんたが来てから何年になるかね」
熱々のトマトスープを飲みながら、ハロルドの隣に座った男が呟いた。

「十年程じゃあないか？」

「たぶん、そのくらいになると思う」

別の男が答え、ハロルドもそれに同意する。荒れ果てて、誰も近寄らなかつた屋敷に彼が住み着いてから、もう十年を数えるまでになつたのか。しかし、もう、というのは人間側からしたもので、彼にとつてはまだ、といったところだろう。十年経つても変わらない外見が、それを立証しているようだ。

「しかし、本当にお前さんが吸血鬼だとは今でも信じられないね」少し離れたところで食事をしていた壮年の女性が、近づいてきて言った。

「だって、全く血を吸わないじゃないか」

身を乗り出して言う彼女に、周りも賛同するように頷いた。

「その代わりに、毎年たくさんのトマトをもらっているから困つたようなハロルド。」

「でもねえ」

納得がいかない様子の人々。

「赤いものなら何だっていいって、毎年言っているじゃないか」眉が下がりっぱなしだ。

「まあ、あたしらは何だっていいんだけどさ。トマトだってねえ」

「ああ。もつとやったっていいんだ」

「いや、あれで十分だよ」

「ずっと最後の一滴までスープを飲み干す。」

「さあ、みんな！ あと一踏ん張り、がんばるよー！」
昼食の時間も終わりのようで、そろそろと動き出した。

観光名所の屋敷に住んでいて、町一番の働き者で、吸血鬼で、でも血を吸わなくて、その代わりにトマトを食べて、それがハロルド・オールコックなのだ。

01 ハロルド・オールコックという男(後書き)

トマトジュースしか飲まないんだって、知ってた？

02 一年で一番賑やかな日々

収穫祭は五日間にわたって執り行われる。ただ、初日だけは祭司と町長のみが行う形式的な儀式の日なので、町民にとっては実質四日間だ。アッシュローズはその四日間、熱気にあふれる。食べて飲んで踊って笑って、その繰り返しだ。寝る暇も惜しんで騒ぐ祭りに、町民も外の人間も関係ない。その四日間、町にいる全員で楽しむのだ。

明日から始まる祭りに備えた町は、まだ夜も更けきる前に静かになっていった。ハロルドも例外ではなく、暖炉の火を消して寝室へ向かおうとした時だった。

ドンドン、ドンドン。

玄関のドアが叩かれる。ため息を一つ吐いてから、階段を下りた。ドアを開けたそこには、男と女と子どもが。皆一様にキラキラとした眼差しだが、最初に口を開いたのは男だった。

「こんばんは、大親友のハロルド。バース一家が遊びに来てやったぞ！」

「こんな夜にか？」

「何だ？ その目は。もっと楽しそうな顔をしろよ。明日から祭りだろ？」

「あつ、こら、ライナス！」

彼の発言を咎めたのは、隣に立つ女性だった。

「もう、パパったら。明日のお祭りのためにここに来たってばれたら怒られるって言ってたでしょう？」

ひょっこりと前に出てきた少年を見て、男を見て、女を見ると、ハロルドは

「……とりあえず、入れ」

疲れたように言った。静まりきった町では騒音に近いような会話が、屋敷内に持ち込まれた。

「さつき消したばかりだから、まだ暖かいだろう。ほら、ライナス、イスを運べ」

談話室に入り、暖炉に火をつけながら指示を飛ばす。

「ハロルドさん、僕は？ 僕は？」

何か手伝うことはないかと尋ねてくる少年に

「大丈夫だから、イアンは座っていていいよ」

と柔らかく微笑んだ。そして全員が座ると、ハロルドはライナスを見据えて言った。

「で、どこからの情報だ」

「どこからもなにも、収穫祭は毎年この辺りじゃないか」

確かに時期は決まっているが、全ての収穫を終えた日から十日後と決められている収穫祭の日程は流動的なものだ。そして毎年収穫の日は変わる。町民以外は確実な日程を知ることが難しい。

「確かにこの辺りなのは間違いない。だが、毎年日程は変わる。そしてお前が最後にこの町に来たのは五ヶ月も前のことだ」

「……」

無言のままハロルドから目をそらす。

「俺がここに引っ越してから、お前たちは毎年毎年収穫祭の前日にやってくる。一体どこから情報を得てるんだ」

「別に言っただっていいじゃないの」

「ドロシー！」

悲観めいた声が部屋に響く。その声に、うつらうつらしていたイアンが目を覚ました。

「静かに白状しろ」

「ほ、ほら、オレ達にはさ、コウモリっていう友達がいるだろ？」

「嘘だな。この辺りのコウモリは全て私に対して協力体制だ。ライナスには収穫祭の日を言うなと伝えてあるんだ」

自信満々のハロルド。

「そんな……ひどい……」

「さ、情報源はどこだ？」

もう一度問う。と、そこへ

ドンドン、ドンドン。

扉を叩く音が。

ドンドン、ドン……がちゃ。

そして開けられた。

「おい。ハロルドー」

さらに、叫ぶ。思いつきり叫ぶ。この夜に、この静かな町で。さすがに入ってきてはいないようだが、それだと余計に近所迷惑なのは間違いない。

「はあ……」

疲れきった表情で立ち上がり

「ついてくるなよ」

とライナスに告げると、階段を下りていった。足どりが重い。早く寝るはずだったのに。そう思いながらあくびをひとつ。

「よ、ハロルド。明日は収穫祭だろ？ 泊める」

隠す気もないらしい。全く毎年毎年困ったものだ。

「日が高いうちに来てくれ、せめて」

屋敷の中へ招き入れた。

談話室に帰ると、満面の笑みでライナスが待っていた。

「ライナス！」

「リック！」

ライナスは立ち上がり、リックは駆け寄って、そして歓喜の表情で抱き合う。

「久しぶりだなー。元気だったか？」

「もちろん。バース一家はいつでも元気いっぱいだからな。そう言うリックは？」

「俺か？ 当然だろ。なんとって明日は収穫祭だぜ？ 四日間ぶつ通しなんだ。元気がなくちゃやってられない祭りだよ」

盛り上がる二人。

「ドロシー。部屋に案内するから、イアンを寝かせたらどうだ？」

そんな二人を放ってハロルドは彼女に提案する。隣には目を開けることに必死で会話を聞いていないイアンが。くすりとひとつ笑いをこぼして立ち上がり、

「そうさせてもらおうわ」

イアンを抱き上げた。男二人はまだあのテンションのままだ。ハロルド達は特に何も告げず、談話室を後にした。

冷たい風が廊下をすり抜ける。冬の足音が聞こえるようだ。

「本当はね、夫人がいつも知らせてくれるのよ」

何を、とは聞かなくても分かる。そして夫人といえば、この町では一人しかいない。

「町長夫人が？」

「そう。ほら、私達って以前からこの町の人達と親しかったじゃない。それでね、あなたがここに来た頃ってふさぎ込んでいたでしょ？」

部屋についたようで、立ち止まり、中へ促す。

「ありがとう。……で、そんなあなたに夫人は町一番の祭りの日ぐらいは楽しく過ごしてもらいたいって思ったらしいの」

もうすっかり寝入ってしまったイアンをベッドに横たわせ、彼女はそこに腰掛ける。ハロルドは入り口に立ったままだ。

「なるほど。それで毎年この時期に必ず来るようになった、と」

「ハロルドが元気になるまでよ、来てくれて言われたのは。それ以降は、来ないか？ だもの」

イアンの髪をすきながら微笑む。母親の顔だ。

「リックは？ あいつは特別この町と仲がいいってほどじゃないと思うんだが」

「ああ、彼はライナスが呼んでるの。二人とも好きだから。とにかく騒げってというのが。さつきも」

言いかけてくすくす笑い出す。楽しくてしかたないといった様子だ。

「私達、二日前に会ったばかりなのよ？ なのに、あんなにはしゃいじゃって」

「……あいつらはいつもそうだ。玄関先で会わせるとうるさくてしようがない」

先程の「ついてくるな」はそういう意味だったのか。

「あ、ハロルド。私もこのまま寝るからってライナスに伝えておいて」

イアンの眠るベッドに潜り込む彼女。ハロルドはそれを了承すると、部屋を出て行った。

廊下にまで聞こえてくる騒ぎ声。それにうんざりしたハロルドは、少し扉を開けてドロシーからの伝言を話すと、すぐさまそれを閉めた。巻き込まれないために。そして素早い足どりで寝室に向かう。滑り込んだ部屋の大きな窓からは、月がよく見えた。

「夫人か……」

ぼつり、呟くと、一人で使うにしては少し大きめのベッドに入っただけで、暖炉の火が消えたのはいつのことだか。

さあ、祭りの始まりだ。

町の中央にある広場に人々は集まる。祭りの間だけ出現する舞台では、朝から陽気に町娘が踊る。各々が持ち寄った料理は、舞台近くに全て集められる。広場にはテーブルとイスを所狭しと並べ、入りきらなければ、そこから広がる道路にまで進出する。料理を食べ、明るい内から酒を飲み、踊り子に拍手を送る。時には、音楽隊と共に歌うこともある。普段の田舎町とはまるで違う顔がそこにはある。そんな中、ハロルドは一番賑やかな一角から離れ、どこかへ歩いていった。

「ん？ どこへ行ったんだ、あいつ」

すでに赤い顔のライナス。燃えるような赤髪も相まって、本当にゆでこのようだ。

「さあね」

ドロシーは目をふせて呟いた。

一方ハロルドは、舞台の一番近くに座っている町長夫妻の側に、

真剣な顔つきで立っていた。

「夫人、少しよろしいですか」

「なあに、ハロルド君ったら、せっかくのお祭りなのにそんな顔を
して」

やわらかく、まるで母親のような笑顔を見せる。それに気を抜いた
彼は

「バース一家のことで、お礼を言いたくて」

少し照れたような息子の顔だった。

「まあ、しゃべっちゃったのね！」

「や、あの、私が無理に聞き出したというか……」
尻すばみになる。

「ドロシーちゃんでしょ。ライナス君はああ見えて律儀な子だから
お見通しのようだ。

「とにかく。全部私のわがままでやったことなんだから、お礼なん
ていいのよ」

「そうそう。こんな小さな町じゃ、少しわがままになってしまっ
た」

今まで踊り子の舞台を観ていた町長も言う。

「この町の人全員が笑顔が見たいってね」

「町長……、夫人……」

「だから本当にお礼はいらさないわ。あなたが元気になってくれた。
それがお礼みたいなものなんだから」

そして夫人は立ち上がり、申し訳なさそうに喜ぶハロルドの体を反
転させた。

「ほら、行きなさいな。大親友は今年も一番の騒ぎっぷりだよ！」
背中を押して送り出す。二、三步進んだところで振り返ると

「ありがとうございます」

一言言つて、彼らの元を去った。

「久しぶりだな、あんな彼の顔は」

「そうね。滅多に見られない、いいものを見たわね」

そして、一年で一番賑やかな日々が終わると、アッシュローズに冬が訪れる。

03 時代遅れの契約

十年前まで、南方のビビッド地方にあるキャナリーに住んでいた私にとつて、ウエルナー国最北のアッシュローズの冬は厳しすぎる。だから、年々日数は減らすものの、中央であるトーンで冬を越すのはもう恒例になっていた。

駅に降り立った私を迎えるのは、今までいた町とはまるで違う景色。だけど、見慣れた景色でもある。毎年冬になるとやってくる街に、木枯らしが吹く。大通りに人影は少なく、コートの前をきつちりと閉じた人達が、足早に通り過ぎていく。落ち葉、新聞紙、誰かのボール。人だけでなく、色々と目の前を横切っていく。あれ、今のは何だったんだ。何かがコロコロと通りを横断した。無意識に目で追った先には黒い塊。

「どうしてこんな都会に……」
近づいて拾い上げてみると、気絶したコウモリだった。少し翼を傷つけてはいるものの、死んではないようで、まだ暖かく、呼吸をしている。そのまま、こちらの家に連れ帰ることにした。

私が借りている部屋は、トーン一安心ことで有名な五階建てアパートの二階にある。基本的に金のかからない生活をしているので、私が稼いでいるそれは全て、この冬越しのためだと言っても過言ではない。

そして大家さんに一言あいさつをして、部屋に向かった。久しぶりに開けたドアの向こうには、懐かしさを感じる。さて、こいつの手当が終わったら、とにかくそうじだな。そう考えながら、窓を開けた。

あれから一週間が経った。コウモリは二日で目を覚まし、包帯は昨日とれた。つまり、元気になったのだ。それなのに、今だリビングの窓枠にぶら下がっている。

「お前、ビビッドに行く途中なんじゃないのか？」

超音波で返事が届く。

「もういいにしたって、そこで私の従者になる理由はないだろう」
窓際のソファに腰を落ち着け、トマトジュースを飲みながら言った。
また返事が聞こえた。

「お礼だつて言われても……」

昨日からこれの繰り返しで、先が見えない。こいつが言うには、ピッドへ行く途中、ここトーンで突風に吹かれ、街路樹にぶつかって気を失ったらしい。そこへ私が現れたというわけだ。

「私の周りじゃ、コウモリを従者にするなんて一昔前の話だ」

そういう契約があることは知っている。儀式のやり方もちろんのこと。だからといって契約したいと思ったことはないし、昔はそういうこともやっていたという認識があるだけだ。実際、アッシュローズのコウモリ達も、私の手伝いはしてくれるが、従えている訳ではない。友人のようなものだ。んー、困った。

次の日も状況は変わらず。窓際のソファに私が座り、窓枠にはコウモリが。そういえば、今日はリックが遊びに来るとか言ってたな。ついでに相談してみるか。そして、リックのためにコーヒーを淹れているとき、

ドンドン、ドンドン。

ドアが叩かれた。いいタイミングだと思いながら外をのぞき、リックを確認してからドアを開けた。

「よ、久しぶり」

「ちょうど今、コーヒーがはいったところだ。寒かっただろ。早く入れ」

ぶ厚いダツフルコートにマフラー、ニット帽、さらに耳当ても手袋もして、防寒対策万全の彼は、それでも寒そうにふるえていた。言っておくが、トーンはそれほど寒くはない。ただこの男が寒がりなだけだ。

「おい、あれはコウモリか？ まさか、アッシュローズから連れて？」

さっそく窓枠に目をとめて聞いてくる。

「いや、駅前の大通りで拾った。怪我をしていたから手当をしてやったんだ」

言いながら私はダイニングのイスを一つ、ソファの近くまで引っ張って置いた。

「ここですか。珍しいな」

リックは防寒具をまとめて部屋の隅にやると、ソファに座って私が置いたコーヒーに手を伸ばした。

「もう見た感じでは元気そうだな」

一口飲んで、告げる。その通り、もうすっかり元気なのだ。

「まあな。だが……」

「気に入られたとか？」

いたずらっぽい微笑みに、肯定を示す。そして私も少しグラスの身を減らしてから

「契約してくれと言ってきた」

コウモリの方に視線をやりながら言った。

「契約……」

そう呟きながら、その言葉の意味を思い出そうとしているようだ。ほら、契約なんてやっぱりもう廃れた文化なんだ。

「ああ、人型になれるだとか、主人が死ぬまで死なないとか、

だっけ？」

「そうだ」

後は、契約したコウモリは主人の血を吸って生きる。というのもある。

「で、ハロルドは何を迷ってるわけ？」

「は？」

冷えた手にすっかり熱を奪われて、ぬるくなってしまうただらうカップをテーブルの上に置いた。

「別に契約したっていいんじゃないの？ 向こうから言ってきたわけだし。断る理由なんてある？」

リックがそう言った途端、大人しくしていたコウモリが突然飛び立ち、彼の周りをパタパタしだした。

「うわ、何だこいつ」

「喜んでるんだ。味方だと思って」

さつきからうるさいほどに聞こえてくる、喜びとリックを讚える言葉。

「いつもは不便だと思うが、今は超音波が聞こえないお前がうらやましい」

「まあな。その辺は人間らしいから。視力も聴力も体力も筋力も、普通よりちよつといいだけだし、血を吸う必要もない。トマトだって俺は嫌いだ」

私の持つているグラスを見て、表情を歪める。

「俺を人間でなくさせてるのは、この、寿命だけだ。……さて、話がそれたけど、契約してやれば？ これだけ喜んでるんだ。よつほどお前の側にいたいんだろ」

「そんなこと言ってるが、お前、ただ契約するのを見てみたいだけだろう？」

この男はそういう男なのだ。

「ま、それもある。コウモリが人型になれるなんて見たこともないからな」

やっぱり。興味津々にこちらを見てくる。コウモリもうるさいくらいにせがんでくる。どうして私はこいつに相談しようと考えていたんだ。

「従えるというのはあまり好きじゃないんだ」

「雇ってるとでも思えば？ 確か、主人の血を吸って生きるんだろ？ それ報酬ってことで」

それも知っていたのか。

「いや、それはそれで……」

「そんなに難しく考えることでもないと思うけど？」

軽く言ってくれるが、私には他にも色々、考慮しなければならな

い問題があるんだ。とか思ったところでそれを口に出せる訳でもなく。ああ、もう、考えるのが面倒になってしまった。

「分かった、契約しよう」

言っただけで、コウモリとリックは喜び、飛び回り、飛び跳ねる。これだけ喜んでもらえたら、悪い気はしないな、と主にコウモリの方を見ながら思った。そしてしばらくすると落ち着いたのか、私の周りを飛び始める。

「じゃあ、始めようか」

伸ばした左腕の向こうに興奮気味のリックが見える。やがてコウモリは、返された手の指先にかぶりと牙をたてた。流れ出る血が舐められるのを眺めながら

「よろしく、アルフ」

と呟く。これで契約は成立だ。

「アルフ？」

「主人がコウモリに名前を付けることによって契約の儀式は完了する。つまり、こいつは今からアルフだ」

すると、感心したように、リックはまだ血を舐めているアルフを見やる。

「さあ、それくらいにして、とりあえず人型になってくれるか」

私がそう言つと、アルフは指先から離れ、私達から少し遠ざかった。そして、一回転する。

「おお！」

一瞬だった。小さなコウモリの代わりに現れたのは、茶髪で鳶色の目をした少年だった。

「改めまして、こちらこそよろしく申し上げます、マスター」
「につこりと笑う様はとても愛嬌がある。」

「あ、俺はリック、リック・フィールドだ。よろしくな」
リックが手を出すと、

「はい、よろしく申し上げます。それと、先程はご協力ありがとうございました。おかげで恩返しができます」

とても嬉しそうに、そして少し照れくさそうにそれを握り返して
た。

04 短い陽、長い日

三日も滞在していたリックは、昨日の昼過ぎにやっとこの家を出て行った。あいつ一人がいなくなるだけで、何とも静かなものだ。

「アルフ、トマトジュースをもう一杯頼む」

「はい、ただいま」

アルフも、リックがいないとあまりやることがないみたいだ。私はトマトジュースでいいし、彼自身も、私の血が食事だ。だが、リックはそうはいかない。普通の食事を必要とするのだ。コウモリの彼はもちろん料理など初めてだが、手先は器用らしく、なかなか上手にしていたと、一緒に作っていたリックが言っていた。見込みがあるそうだ。私と暮らしていただくではあまり必要としない能力なのが、少し残念なところか。そうじするにしても、アツシユローズの屋敷ならば、一日では到底終わらないほどだが、この家は半日もあれば隅々まですんでしまう。私は暇には慣れているが、彼はどうだろうか。今朝使いに出して買ってきてもらった新聞から顔を上げてみる。

「暇か？」

机に肘をつき、顔を支えながらぼーっとどこかしらを眺めている彼が目に入った。

「！ いえ！」

明らかに退屈だろうに、私に遠慮しているのか、大きく首を横に振る。必死な姿が可愛らしくて、ついつい笑ってしまった。

「少し、出かけようか」

そう言っただけ新聞をたたみ、立ち上がった。

「はい！」

嬉しそうな顔が目に入った。

特に用事もなく思いつきで家を出てきたので、ぶらぶらと大通りを歩く。今日は少し暖かいからか、人通りが多いように感じた。適

当に歩いているだけなので、すぐに飽きてしまつかと思ったが、アルフは何だか楽しそうだ。

「楽しいのか？」

「もちろんです！ 見たこともないものがたくさん！」

振り返ってそう言う彼の目は輝いている。出てきて正解だったな。

「気になるなら、どこか入ってみるか？」

再びショーウィンドウに目を奪われているアルフに聞いてみるが

「そんな！ 結構です！」

と、断られてしまった。どうやら遠慮しているらしい。まあ、今日は別にそれでもかまわないか。欲しいと言ったものを全部買ってやるだけのお金を持っているわけでもないことだし。

そんな中、去年はなかったであろう店を目撃く見つけてしまった。

「少し、あの店に寄ってもかまわないか？」

「え？ あ、はい、もちろんです」

きよとんとした顔をしながら後ろをついてくる。私達が入っていたのは、書店だった。開け放たれたままの扉から中に入る。古書店のように独特ではないものの、どこか「本屋」だと思わせるような匂いが鼻まで届いてくる。適当にふらついていると、後ろをちよこちよこついでくるアルフに気づいた。

「好きなところへ行っていいんだぞ？」

「でも、僕は字が読めません」

少し申し訳なさそうな顔をする。そう言われればそうか。つい先日までただのコウモリだったのだ。字を読む必要もなかったわけだから、読めなくて当たり前だ。

「そうだな……、じゃあ、ちよつとついておいで」

そうして向かった先は

「好きなものを選びなさい」

「これは？」

子ども向けコーナーの一角。

「文字の読み書きを練習するためのドリルというものだ」

不思議そうに、たくさん並べられたカラフルな表紙をながめている。「冬の暇な時期には読書が一番だ。文字が読めるようになれば、今日みたいに退屈することは減るだろう。ほら、好きなのを選びなさい。私は別の所にいるから」

そう言い残して、表紙に目を奪われたままのアルフから去った。

しばらく本棚を眺め、たまに手に取り、購入する本の吟味をしていると、後ろからコートを引っ張られる。振り向くと、一冊のドリルを大事そうに抱き締めたアルフがいた。

「決まったのか？」

「はい。この絵が、とてもおいしそうだったので」

はにかんだ笑顔が向けられる。突き出されたそれを見ると、カラフルなデザートが表紙いっぱいになりばめられていた。

「それは食べられないぞ」

笑いをこらえながら言って、レジへ向かう。もうすでに自分の物のようにそれを抱えたアルフが

「わかってます」

と小さく言うのが後ろから聞こえた。本当に、今日は外に出てきてよかったと思う。

さて、日が傾きだした頃、私達はアパートへ帰ってきた。冷えてきた空気を身に纏い、とんとんと階段を上る。一度も他の住民を見たことのない通路には、やはり今日も誰もいない。錆びた鉄のドアを開くと、昼間の熱をふんだんに蓄えた暖かい部屋があった。

「とりあえず、トマトジュースを」

買ってきた物をテーブルに置き、上着を脱ぐ。それを受け取ってハンガーラックにかける彼を横目で見ながら、ソファに腰を落ち着けた。すぐにグラスに入った真っ赤な液体が運ばれてくる。一気に飲み干し、そのまま彼に渡した。

「ありがとう」

私がそう言っていると、アルフはにっこりと笑ってその場を去る。そして

袋から買ったばかりの本を取り出し、何枚か捲った。前書きを読もうとしたところで、気づいた。

「アルフもお腹が空いただろう。こっちへ来なさい」
パタンと閉じる。

「はい」

ダイニングのイスに座っていたが、私に呼ばれ、おすおすとそばに寄ってきた。真ん中に座っていたが、右側に少しずれて、アルフが座れるようにする。

「ありがとうございます」

「さあ、どうぞ」

どうぞ、とは言つものの、私はただ何もせず、首を晒しているだけ。両肩に手が置かれると同時に、少しだけ首を傾げた。

「……失礼します」

伸び上がって体重をかけてくる彼から緊張が伝わってくる。一瞬の冷たさのあと、蚊に刺されたような痛みが走る。かと思えば、今度は血を舐める暖かい舌の感触。本来は血を吸う側の私が、逆に血を与えるというのは、何だか不思議な感覚だ。そんな風に考えていると「ごちそうさまでした」

と声が聞こえ、私の首筋から離れていく気配が。どうやら食事が終わったようだ。噛まれたところに手をやってみる。少しぬるつとしたが、もう血は止まっていた。そして赤色がついてしまった手を洗うために立ち上がると、つられたように顔を上げるアルフ。彼の口元にも同じ赤がついていた。トマトジュースよりももっと濃い、毒々しいほどに鮮やかな赤が。

「ついでるぞ」

ふっと笑みをこぼしてそう言い、血のついていない方の手を伸ばして少し拭ってやる。一瞬呆けていたが、何のことだか分かったようです、すいません!」

流し台へかけて行く。私も手を少し浮かせながら、後を追った。

05 その怒りは誰のために

アルフに文字を教え始めてから幾日か経ったある日のこと。いつものようにダイニングのテーブルに向かい合って座り、書きながら覚えようとしている彼の前で、私は本を読んでいた。

「あ」

視界の端に黒い物がちらついたので、窓の方へ目をやると、コウモリが一匹。部屋へ入ってこようとバタバタ飛び回っているのが見えた。

「誰だ？」

大抵こういう場合は、コウモリを使った伝言か何かで、つまりこいつは知り合いから放たれたコウモリなのだ。

窓を開けてやると、中にするりと入ってきた。と同時に、伝言が垂れ流される。

「今から行くから待ってて！」

名前がない。電話のように声そのものを届けるでもなく、手紙のように筆跡を届けるでもないこの伝言方法では、名前がなければ誰だか分からない。基本的には。先程から繰り返され続けている

「今から行くから待ってて！」

というこの言葉と、自分の名前を言い忘れるような奴に心当たりがないわけではない。だが、当たっているかどうかも分からない。そもそも、一体どこから来るといふのだ。情報が少なすぎる。

「マスター！」

頭をグルグルと悩ませていると、隣から大声で呼びかけられた。どうやら一度目ではないらしく、服を引っ張るといっておまけまでついている。

「ああ、すまない。どうした？」

「これって、止まらないんですか？」

顔をしかめながらそう尋ねてくる。

「そうだな、少しうるさかったな」

開け放したままの窓へコウモリを追い立てた。どうりで寒いわけだ
と思いつながら窓を閉めると、叩かれるドアの音。

「もしかして、伝言の人でしょうか」

随分と早い到着だが、きつとそうだろう。

「たぶんな」

答えながらドアへと向かう。大方予想はついた。さあ、どんな文句
を言つてやろうか。

「やあ！」

ドアを開けると、もう一度閉めたくなるくらい満面の笑みが視界に
広がった。とりあえず怒鳴り散らすために腕を引っ張り、中へ入れ
る。

「ライナス。あの伝言はなんだ！」

「何つて、だから今から行くつていう伝言だろ？」

本人はいたつて真面目な様子だ。大きなため息をついてみせると、
不思議そうな顔で見られた。

「せめて名前だけは伝えてくれ……」

「ああ！ すっかり忘れてた」

言いながらニコニコと笑うライナスの表情が、ふと、固まった。笑
つたまま、固まった。どうしたのかと視線の先に目をやると、そこ
にはアルフが。

「そう言えば、私もすっかり忘れていた。アルフ、自己紹介を」

一歩後ろにいたアルフを前に来るように促し、ライナスの目の前ま
で持つてくる。やつは今だ固まったままだ。

「あ、あの、先日からマスターの元でお世話になっています、アル
フです。どうぞよろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げて、再び私の後ろに立つ。リックに対しては感じ
なかったが、人見知りなのだろうか。

「ハロルド」

ライナスから声があがった。固まったままの表情は変わり、なぜか

それが険しくなっている。私を呼ぶ声もいつもとは違い、どこか緊張しているように感じた。

「何だ？」

つられて私も怪訝な表情になる。異様な雰囲気、後ろのアルフもさらに緊張したのが分かった。

「今、こいつはなんて言った？」

「聞いていなかったのか？ 仕方ない。アルフ、もう一度いいか？」
呆れた。表情が固まっている間、思考も固まっていたっていいのか？

「いや、いい。自己紹介は聞いていた」
視線はまだアルフに刺さったままだ。

「今、ハロルドのことを『マスター』と言ったか？」
今度はアルフに尋ねる。

「は、はい」

「お前、コウモリだな」

それは確信を持った問いのようだった。

「そう、です」

強張った彼の怖いだろう表情を見つめ返ししながら、退き気味に答えた。すると突然、ライナスの雰囲気は怒りに変わった。

「ハロルド！ お前、コウモリと契約するって意味を、ちゃんと分かっているよな！」

ああ、今のこの言葉で、これまで彼がとってきた不可解な行動や言動が理解できた。

「……アルフ、すまないが少し席を外してくれるか？」

窓を開けると、

「それでは、お話が終わりましたらお呼びください」

コウモリになって、夜の街へ飛び出していった。彼はまだ、何も知らないから。

「ハロルド！」

窓を閉めた直後、再び呼ばれる。怒りの中に、悲しみを滲ませた声で。

「分かつてる。ちゃんと、分かつてる」

振り向くと、今にも泣き出しそうな顔が目に入った。

「トマトジュースで生きていたっていい！ 血を吸うのと大差はない！ でも！」

そこで一度深呼吸をして、静かに言った。

「もう、自分から寿命を縮めるようなことは、しないでくれよ」
膝を折り、その場にうなだれる。

「そんなつもりでアルフと契約した訳じゃない。確かに、血を吸わない私が、血を分け与えるような契約を結んだ。トマトで全てが補えるとも思っていない。だが、それでもリックより先に死なない自信はある。まあ、ライナスやドロシーより長生きできるなんてのは欠片も期待していないが」

「それはいい、覚悟はしてる。……じゃあ、どうして契約なんか顔を上げた。」

「私にもよく分からない」
聞かれると困る問題だ。案の定、驚き呆れたような表情を浮かべている。

「なりゆきのようなものだった。道ばたで怪我をしているところを拾って手当してやったのが最初だ。そのお礼だとかで、どうしてもとあいつがしつこく言ってきたし、そこまで慕われるのに悪い気もなかった。寿命のことをすっかり忘れていたとか、そういうのではない。たぶん、それよりも重要なことが頭をよぎったんだと、今ではそう思う」

長々と語る私の話を、ライナスは静かに聞いている。

「死ぬときに一人じゃないって、きつと、そう考えたんだよ」

そう告げた後、ライナスは再び俯き、黙ってしまった。彼はこの話を、私の考えを、どう受け止めたのだろうか。私は窓際に立ったまま、ライナスはテーブルの側に跪いたまま。しばらく続いた沈黙を破ったのは、ライナスだった。

「じゃあ」

表情が見えない。

「死ぬことは考えていないと思っただけで大丈夫なんだな」

「ああ。言ったはずだ。リックより先に死なない、と」

私がそう言っていると、ライナスはすつと立ち上がった。だが、まだ俯いている。

「あいつは、あのコウモリはいいやつか？」

「もちろんだ。それに、アルフはかわいいやつだ」

「……そうか」

そしてそのままこちらへ歩いてきて、私の肩に額を寄せた。赤毛が首をくすぐる。

「今度はイアンも連れてくる」

「それは楽しみだ」

窓を開けて入ってきたのは、刺さるような冷たい空気と、追い出してしまったアルフだった。

「ただいま戻りました」

「すまなかった。追い出すような真似をして」

「いえ、かまいません」

にっこりと笑顔つきで言ってくれた。

「ところで、あの方は帰られたのですか？」

部屋を見回しながら尋ねてくる。私はトマトジュースを飲むために冷蔵庫へ向かう。

「話が終わってすぐに帰ったよ。次に訪ねてくるときは、息子も連れてくるそうだ」

「息子、ですか」

「アルフと同じくらい歳の子だ。きっと仲良くなれる」

グラスを持って振り向くと、

「楽しみですね」

にっこりと笑うアルフがいた。

閑話 何も知りません

突然やってきたのは、どうやらマスターの友人らしかった。燃えるような赤毛と、明るい大きな声が印象的だった。

そして僕は、部屋を追い出されることになる。

外の空気は冷たいけれど、飛んでいるうちはあまり寒さを感じない。障害物を避けながら、目的もなく飛び回る僕の頭は、さっきのことでいっぱいだった。あれは、明らかに敵意を向けられていた。僕とマスターの繋がりも、そして僕自身を否定する言葉を投げかけられた。僕は、マスターと契約できてとっても嬉しかったけど、それはいけないことだったの？

そろそろ話が終わる頃かと思つて部屋の近くで飛び始める。すると、すぐに窓が開けられた。招き入れられた部屋の中は予想通り暖かい。

「すまなかつた、追い出すような真似をして」

「いえ、かまいません」

僕が聞いてはいけない話だったということは、重々分かっています。「あの方は帰られたのですか？」

尋ねてみると、肯定される。少し、ほっとしてしまった。マスターの友人なのに。

「次は息子も連れてくるそうだ」

……どうしてそんなに嬉しそうなんですか。僕とあなたの関係を否定した彼がもう一度来ることを、どうしてそんなに喜べるんですか。

「息子、ですか」

正直なところ、もう二度と会いたくない。

「きつと仲良くなれる」

息子も赤毛なのだろうか。明るい大きな声で話すのだろうか。そして、同じように僕を否定するのだろうか。

「楽しみですね」

もう二度と、会いたくないんですよ、本当は。

僕は何も知らない。あなたがトマトジュースしか飲まないわけも、僕と契約したことを知った彼が怒っていたわけも、何も。きっともっと知らないことはたくさんある。全部じゃなくでもいいです。だから、いつか少しでも教えてくれますか、マスター！。

06 同じ名前の男(前)

ウエルナー国にも春が訪れ、アッシュローズへと帰る季節になった。中央に比べるとやはりまだ寒さは残るが、暮らす分には支障がない程度だ。すれ違う人々に帰還を喜ばれ、時にはアルフを紹介したりしながら屋敷へと向かう。途中、そういえば、と男性が私達を呼び止めた。

「一週間ぐらい前かな。妙な男が来たんだ」

「そうそう、と一緒にいた息子も話す。」

「吸血鬼の屋敷はどこだー！ って言ってた」

「パン屋の主人が『ハロルドさんの屋敷はあれだが、冬の間は中央にいるんだ』って教えてやったのさ」

「そしたらね、今度は、いつ帰ってくるんだって叫びだして」

この静かな町でそれだけ騒いでいたなら、すでに町の人々はみんな知っているのだろう。

「ああ、その男ならまだ居座ったままだよ」

通りすがりのおばさんまで会話に飛び込んできた。

「私に何か用だろうか」

「そう呟くと」

「そうだとは思っけど、気をつけなよ」

「何かあったら、うちに泊まればいいから」

次々に投げかけられる心配の言葉。そして、最後の男の言葉にふと疑問を浮かべる。

「で、その男は今どこに？」

「あんたの家の前さ。ずーっとね」

屋敷の前に着くと、町の人達が言っていたとおり、見知らぬ男が座り込んでいた。ただし、

「寝てますね」

「ああ、寝てるな」

首が据わっていないかった。客人がどうか分からないので、起こしてやるか迷ったが、面倒事の予感がしたので放っておくことにした。

「いいんですか？」

門を振り返って尋ねてくる。

「かまわん。さ、早く入れ。大量のそうじが待ってるぞ」

冬の間積もったほこりや汚れを落とさなければならぬのだが、これが毎年大変なのだ。今年から二人になって、少しはかどると思いたい。この時ばかりは、広すぎる家も困りものだと実感するのだ。

手始めに、寝室から取りかかることにした。それから談話室、風呂場へと移動していこう。今日の所はきつとそこまでしか終わらないだろう。必要最低限の場所だけきれいにできれば後は明日以降でも別にかまわない。ただ、アルフの部屋だけは早くしてやりたい。そんなことを考えながら窓を拭いていると、外に見えたのはまばらな緑とあの男。どうやらまだ寝ているらしい。不規則に揺れる頭がそう告げていた。

暖炉室をそうじしている途中で、部屋にあった時計が十二回鳴った。だが、もう少しで終わりそうだったので、そのつま続けることにする。あの男はまだ目覚めない。夜行性なのだろうか。しかし町人が言うには、男が来たのは昼間のことだ。まあ、そんなことはどうでもいいか。真実がどうであれ、やつが厄介者であるだろうことに変わりはないし、この作業がはかどるわけでもない。

「マスター？」

いつの間にか手が止まっていたようだ。様子をうかがうように下からのぞき込まれる顔があった。

「あ、ああ、すまない。どうした？」

「こちらが終わりましたので、トマトジュースでもと思ったのですが、この屋敷が初めてですので、場所が……」

「そういえばまだ案内してなかったな。食事がすんだら行こうか」
言いながら最後の窓ガラスを拭き終え、振り返る。わくわくしてい

る目に思わず笑みがこぼれた。もうこの行為にも随分と慣れた。私も、アルフも。

日が落ちて、町がだんだん静かになると、夜がやってくる。目標としていた箇所的那样も終わり、二人そろって談話室でゆっくりしているとところだ。文字が読めるようになったアルフは読書家になった。

「そろそろ寝るか？」

血を吸う必要のない私の夜は早い。人間が寝入る隙を狙わなくてもいいからだ。

「はい」

返事をしたアルフは読みかけの本をイスに置き、暖炉の火を消す作業に入る。私はふと気になり、窓の外に目をやった。彼はまだ寝ているのだろうか。

「あ」

「どうかしましたか？ マスター」

声をもらった私にアルフが尋ねる。

「いや、なんでも」

「なぜだー！」

ない、と続けようとしたものの、外からの大声に阻止されてしまった。私が窓の外をのぞいたとき、ちょうど彼が起きる瞬間だったのだ。静かな町に、いつかと同じく騒音が響き渡った。

少し前にさかのぼる。そう、ハロルドが窓の外をのぞいたときだ。彼の家の前で寝ていた男は、目を覚ました。そして、空を仰ぐ。すでに星が瞬く空だった。これまでと同じように、家主である吸血鬼の帰りを待つため、夜という時間帯に起きた。吸血鬼の弱点は太陽だと信じているからだ。

ふと、いつもと何かが違うような感覚が彼を襲った。はっきりとは分からない何か。そしてそれは、ほとんど無意識に後ろを振り返

った瞬間だった。

「……窓に、明かり」

もちろん、ハロルド達である。次に、理解する。吸血鬼が帰ってきた、と。

「なぜだー！」

思わず立ち上がり、大声をあげた。

扉を開けると、門の前には、大口を開けたまま固まった男が。

「何の用だ」

そう言うと、我に返ったように一瞬体をびくつかせ、言った。

「お前が吸血鬼のハロルド・オールコックか！」

「そうだが」

「お前を捕まえに来た！」

厄介者の予感を確信に変えるのには、この言葉で十分だった。

先程からこの短時間でどれだけため息を吐いたことか。憂鬱な気分を抑えきれずにもう一度はき出すと、隣から心配そうな視線が向けられる。たどり着いてしまった扉では、部屋を出たときから聞こえていた、ドンドンという大きな音がしている。

「たぶん大丈夫だとは思いますが、念のためにコウモリになって天井にでもいなさい」

「はい、マスター」

答えたアルフは音もなく一瞬でコウモリの姿に戻り、飛んでいった。

「さて。今開けるから、あまり大きな音を立てるな」

後半、少し大きな声で言うと、扉の向こう側は静かになった。そして、少し間を空けてから扉に手をかけ、ゆっくりと開いていく、はずだった。

「おい！ お前が吸血鬼のハロルド・オールコックか！」

向こう側から強制的に空けられた後、大きな声をあびせられた。

いたって冷静なハロルドと、激情した男。いきなり彼に突っ込ん

で行っても、かわされるのは当然だった。

「とりあえず落ち着け。もう夜も遅い」

町の人たちに迷惑をかけたくないという思いからの発言だろう。しかし、そんなことはこの男には関係ない。

「うるさいっ！」

なにやらごそごそと脇に抱えたカバンをあさる。うるさいのはそっちだろうと思っても口には出さない。顔には惜しげもなく出されているが。

「これでもくらえ！」

そう言つてハロルドに向かつて大量に何かを投げつけた。余裕の表情でそれを避けながら、そのうちの一つを受け止めた彼は、手の中を見つめる。ニンニクだった。振り返れば床のそこかしこに転がっている。

「くれるのか？ アルベルトが大好きなんだ。ありがとう、今度渡すことにする」

この言葉に男は焦りを見せた。

「くそっ、これならどうだ！」

次にカバンから出てきたのは小さめのロザリオ。

「ん、なんだ？ お前カトリックなのか。ちよつどいいじゃないか。この町の教会はカトリックだ。夜が明けてから行くといい」

相次ぐ攻撃と思われるものを、なんともなしに対応していくハロルドに、男はたじろぐ。何だお前は。表情がそう語っている。

「どうして効かないんだああ！」

今度は直接襲いかかった。伝説として語られているニンニクも十字架も効果がないのだ。実力行使しかないと思ったのだろう。しかし仮にも吸血鬼だ。普通の人間よりも身体能力はかなり高い。そんなハロルドに勝てるはずもなく、決着はすぐだった。もちろん捕らえられているのは男の方だ。

「今日はもう眠いんだが、しかたない。話を聞かせてもらつて。…来るなら昼間の方がまだよかつた。やはりあのときに起こすべき

だっ
たか」

ハロルドのつぶやきを耳に入れた男はとうとう言葉にした。
「本当に吸血鬼か？」

07 同じ名前の男(後)

一応おとなしくはなったが、何かあつては困る、というよりかは面倒なので、イスに縛り付けられている。何の抵抗もなくうなだれている。

「で、なぜ私を襲いに来た」

暖炉室の中央に運ばれたイスと、その前に立つハロルド。アルフはまだコウモリのままで、部屋の天井にぶら下がっている。

「俺には父と母と妹がいた」

突然始まった家族の話。

「妹はまだ幼くて、いつつも俺の後をついて歩いていったんだ。笑顔がかわいらしい子だった」

「何の話だ」

眉をひそめて尋ねるが、男の話は止まらない。

「父さんは釣りが好きで、俺たちはヴェールティユールに住んでいたんだが、大きな湖のあるヴァイオレットまでいつも出かけていた。その日の収穫が食卓に並ぶことだってよくあった」

ここで一度、口を閉ざした。だんだんと体が震え始める。

「母さんは、町一番と言われるほどきれいで、自慢の母親だった」
声にも震えが混じる。まだ、顔は上がらない。

「よく働く、優しい母さんだった。母さんも父さんも妹も、大好きだった」

後ろ手に縛られた手は拳をつくり、これでもかというように固く強く握りしめている。そしてとうとう、うなだれていた顔が持ち上げられた。唇を噛みしめ、大きく開いた目には涙がたまり、その表情から読み取れるのは、悲しみと苦しみと、悔しさ。

「そんな！ そんな俺の家族は吸血鬼に殺された！」

ハロルドと同じ黒い髪は涙で頬に張りつき、すぐに伏せられたきれいな深い青の目に一瞬宿ったのは、憎悪だった。

「あいにくだが、私にはお前の家族を殺した記憶がない。そもそも人間を殺したことなどない」

静かに言い放つ。

「そんなこと、顔を見たときに分かっていた」

今度は窓の方に顔を向ける。

「じゃあなぜそれでも襲いかかってきた」

ハロルドの視線の先は変わらない。

「同じ吸血鬼だ。特徴を言えば、あいつがどこの誰だか分かるかもしれない。だから、弱らせてから聞き出そうとした。……何も効かなかったが」

少し、気持ちを落ち着かせたようだ。淡々と言葉にした。

「なるほどな。お前、復讐をしたいのか、その吸血鬼に。それなら、ヴァンパイアハンターを紹介してやる。安心しろ、腕は確かだ」

何がどうなっている。どこで俺は間違えた。どうして吸血鬼にヴァンパイアハンターを紹介されることになっているんだ。いや、それはありがたいのか。でも絶対に何かが間違っている。そもそも、ニンニクや十字架や太陽の光が弱点じゃないのがおかしい。もしかしたらおかしいのはこっちなのか？ 誰だ、最初にそんな誤った情報を書いたのは。

「アルフ、リックを呼んできてくれ。あの男は寒がりだからきつとビビッド地方のどこかにいる。私の名前を出せば、みんな協力してくれるはずだ」

リックという名前の男が、紹介されるヴァンパイアハンターだろうか。じゃあ、アルフってのは誰だ。誰に向かって話しかけているんだ、こいつは。

「お前と契約してよかったよ。リックには音波じゃ連絡がとれないからな。頼んだ」

そう言ったあと、コウモリが一匹、ハロルド・オールコックの周りを一周して窓から出て行った。

「契、約？」

「ああ、今のコウモリは、私と契約して人型になれるようにしたコウモリなんだ。その辺りのこともリックに聞くといい」

人型になれるコウモリだと？ そんなもの聞いたこともない。

「そう言えば、まだ名前を聞いていなかったな。私は知つての通り、ハロルド・オールコックだ。お前は？」

どうして敵と同じ吸血鬼に名前を教えなきゃならないんだ。そう思ったはずなのに、俺の口は勝手に動いていた。

「クロード・サブレだ」

すると、やつの雰囲気が一瞬にして変わった。これは動揺だ。全身からとまどいがあふれ出ている。俺の名前がどうかしたのだろうか。家族を襲った吸血鬼でないことは俺自身が証明している。じゃあ、どうして。

それから二時間くらい経つただろうか。見える位置に時計がないので憶測だ。その間、俺たちの間に会話は一切なかった。そんなことを考えている折だった。もう真夜中とも言える時間帯に騒音がやってきたのは。

「おーい、ハロルドー。来てやったぞー」

動揺が、消えた。

「はあ。全くあいつはいつもいつも」

呆れたような声色のハロルド・オールコックは、一度大きく息をついてから、部屋を出て行った。

リックさんは吸血鬼ではないとマスターから聞いている。でもいっただったか、自分のことを人間でないと断っていた。どちらも嘘とは思えないから困る。

ビビッド地方にある、トーンと隣あわせの街、カーマインでリックさんを見つけた。僕は特別なコウモリだから、三十分近く飛ばせばビビッドに入ることができた。そこからコウモリ達を集めて協力を仰ぎ、目標を見つけた。普通の人間ならば、ここから電車に乗って、

それがなくなればバスに乗り、それでもアツシユローズまでは行けないので、最後は徒歩で行く。合計すれば一日がかりの移動のはずだ。それを覚悟して駅の方へ向かったのに

「どうしたんだ？ そっちはアツシユローズじゃないだろ」

そう言つて、まっすぐ家のある方へ走り出したのだ。その走りに迷いなんてなくて、リックさんからは、いつも使うよく知つた道を走っているというような感じを受けた。

そうしてそのまま僕の前を走り続けて、とうとう予想よりもずいぶん早くアツシユローズの家に着いてしまった。カーマインから家まで、人間でも吸血鬼でもない彼は、僕と同じ速さで移動した。

「おい、ハロルド！。来てやつたぞー」

ああっ、僕が考え事をしている間に！

「ちよつと、リックさん！」

またマスターを困らせてしまった。

「こんな夜中に大声を出されては困ります！ 近所迷惑です！」
できるだけ小さな声でリックさんに訴えかけていると

「よく言つたぞ、アルフ」

マスターの声がした。まだ階段を下りている途中だったけど、とても静かだから僕の小さな声でも聞こえたんだろう。マスターにほめられて嬉しくなった。下を向いて小さく笑む。

「おいハロルド。最近アルフの言うことがお前に似てきてないか？ それを聞いて、僕の頬はまた一段とゆるむことになった。」

マスターが暖炉室の扉を開けると、出て行つたときと全く同じ光景が広がっていた。つまり、イスにぐるぐる巻きにされた男の姿。

「リック、ある程度の説明は聞いたか？」

道中、事の流れは話しておいたから、大丈夫です、マスター。

「ああ。復讐したい吸血鬼がいるんだつてな」

扉付近で立ち止まったまま話を続ける。

「そつらしい」

「で、お前の名前は？ 俺はリック・フィールド」

リックさんはそこで初めて男を見た。そう言えば僕も名前を聞いていなかったし、教えていない。あとで自己紹介をしないと。そうして男はなぜかマスターの顔をうかがうようなそぶりを見せ、口を開いた。

「ク、クロード・サブレ、だ」

「リック！」

何が起こった。素早く見えなかった。とにかく、今の状態から推測すると、男を攻撃しにかかったリックさんをマスターが止めた、というところだろう。最後の所しか僕には見えてないけど。男の首に当てられたナイフを持つリックさんの手は震えていて、マスターが止めなかったら、確実にそれは喉をかき切っていたと思う。リックさんの顔は、マスターに襲いかかってきたときの男の顔に似ていた。

「リック！」

手を離さずに、マスターがもう一度名前を叫んだ。

「あいつとは違う！ こいつは人間だ！ 分かってるはずだ」

どういうことだろうか。ナイフを当てられているにも関わらず、恐怖ではなく興味をその顔に浮かべている男。

「あいつは、十年前、お前がその手で殺した。この世にはもう、存在しない」

ああ、また僕の知らないことだ。

ハロルドが静かに、諭すようにそう言うと、リックは

「ああ、そうだったそうだった。思い出した。大丈夫だ。もう解った」

腕を降ろした。サブレとアルフの顔は何か聞いたそうな雰囲気ではないのだが、二人とも説明はしないつもりらしい。

「そうするとあれか。俺は弟子になるやつを殺してしまいそうになったわけか。危ない、危ない」

はははと笑っているのもちろん彼だけ。

「でも困ったな。名前が呼べない。……よし、お前改名しろ」

突然襲いかかったあげくに改名しろときた。本当にこの男について行っていいものかとサブレが悩み始めた頃、

「サブレと呼べばいいんだ。いいか、お前も、今後名を名乗るときはサブレとだけ言うようにしろ。次はないかもしれないからな」

との言葉が。かなり理不尽だが、「クロード」という名前に何かあることは分かったのだろう。渋々といった感じではあったが、頷いた。それを見て、ハロルドはサブレの縄をほどいてやる。

「じゃあ行くか。さっさとここを出るぞ。ライナスが来たら面倒だ」
「え、もう行くんですか」

さっきまで固まったままだったアルフが、その言葉に動き出した。

「言っただろ。ライナスが来ると面倒なんだ。あと、ここは寒い」
後半の方が理由の大部分を占めているような気がしないでもない。

「ああ早く行け。私はもう寝たいんだ。本当なら、もっとずっと早くに寝るはずだったのに」

ぶつぶつと言いながら暖炉の火を消しにかかる。その背中に向かって
「今から寝るのか？ もう外は夜明けだぜ」

笑いを含んだ言葉が。ボタンと扉が閉じられると、盛大なため息が部屋に響き渡った。

07 同じ名前の男(後)(後書き)

記憶の隅にいて、決して消えない名前

08 始まりはすぐそこに

ハ口ルドの家を出た二人は、とにかく南へ歩き続けていた。

「まあ聞きたいことはたくさんあると思うが、とりあえずこっちは一つ質問させてくれ」

一歩前を歩くリックが振り返る。

「何だ」

「お前の家族が殺されたのはいつの話だ？」

リックのその問いに少しだけ顔を歪めて

「四ヶ月前だ」

短く答えた。

「うん、それなら大丈夫だな。そいつはまだ生きてるはずだ。復讐は自分の手でやるのが一番だからな」

言いながら前を向いてしまったので、サブレからはそう言った彼の表情を見ることはできなかった。

「さ、何でも聞いてこい！」

「……まず、どうしてニンニクとか太陽とかがあいつに効かなかったのか。それとコウモリと契約するって、人型になれるってどういうことだ。俺の復讐相手がまだ生き」

「と、ストップ！ 一気に質問しすぎだって。道のりは長いから、そんなに焦らなくても大丈夫だ」

まだまだ続きそうな言葉を遮った。

「えっと、吸血鬼の苦手な物、だっけ？ さっき言った太陽とかニンニクっていうのは単なる迷信にすぎない。昔の記述にそんなことが書いてあったりするから、随分前の吸血鬼はそうだったのかもな」

吸血鬼の随分昔なんてどれほど前のことなのだろうか。

「でもそれが本当かどうかを確かめることはできないし、今の奴らにとってそれは弱点じゃない。現に昼日中から歩き回ったり、ハ口

ルドの友人にはニンニクが好物だって奴もいる」

「そんな……」

「知らなくて当然だ。このことは吸血鬼本人か、吸血鬼ハンター、それとそいつらと関わりのある人間しか知らないことだからな。吸血行為だって夜中に行われるわけだから、太陽が苦手だって信じていてもなんらおかしくない。お前は普通だ」

木々の間を縫い歩きながらそう説明する。太陽はすっかり昇りきっているが、ハロルドはあれから睡眠に入ったのだろうか。

「なら、吸血鬼に弱点はないのか？」

不安が顔中に広がる。

「いいか。吸血鬼つてのは、人間よりも少し寿命が長くて、腕力や脚力、いろんな力が人間より少し優れているだけの種族だ。つまりあいつらだって心臓が止まれば死ぬし、頭を切り落としても死ぬ。もつと言えば斬りつければ血だって出る。赤い、な」

初対面で攻撃されかけ、そしてそれを止めてくれた時のスピードを考えれば、少しなんてものじゃないことは彼にだって分かる。リックは特別であるがために、人間と感覚がずれているのだろう。

「だから、吸血鬼と戦えるぐらいの強さがあれば、誰だって吸血鬼ハンターになれるんだ」

まるで、簡単なことだろうとでも言うようなリックの横顔は、どこか誇らしげだ。

「俺もそんなに強くなれるのか？ あいつを倒せるぐらい強くなれるのか？」

「なれるさ。俺がついてるんだ。それに、本来ハンターつてのは二人一組で行動するもんなんだ。……で、次は何だっけか。コウモリの契約について、だったか？」

リックの言葉で表情に明るさを取り戻して、サブレは軽く頷く。

「詳しいことは俺よりもハロルドに聞いた方がいい。もう大昔に廃れた契約らしいから、吸血鬼じゃない俺には分からない。さっき俺と一緒に部屋に入ってきた奴がいたろ？ あれはハロルドと契約し

たコウモリで、アルフって言う」

記憶を引っ張り出すように数回瞬いてから

「ああ、あのちっこいのか」

小さく呟いた。あんなどたばたとした状況だったが、アルフをきちんと認識していたらしい。

「そうそう。だから、今度会った時にでも聞きな。他に聞きたいことは？」

その言葉を受けて、ためらいがちにサブレは口を開いた。

「吸血鬼ハンターなのに、どうして吸血鬼と仲がいいんだ？」

「吸血鬼って言ったって、みんながみんな悪じゃない。人間と一緒に。善い奴もいれば悪い奴もいる。この場合の悪いってのは、主に人間を殺すって意味だけだな」

前を行くリックには見えていないだろうが、サブレはそれに頷くことで納得を示す。

「人間を殺したり、むやみに同族を増やす行為をすると、俺たち吸血鬼ハンターの対象にされる」

「同族を、増やす？ ちょっと待て、そもそも吸血鬼ってどうやって増えていくんだ？」

「吸血鬼の子は吸血鬼。言っただろ？ 基本的なところは人間と変わらないんだってば。だけど、もう一つ増やす方法があって、それをむやみやたらにすることが禁止されてる」

吸血鬼の血液が人間の体内に入り、混ざることによって吸血鬼は誕生するという。近現代では注射器という便利な物が使われることもあるようだが、もっぱら飲血が主流である。しかしそれよりも昔には、違う方法があったらしい。

「違う方法？」

血を飲むということを想像したのか、少し歪められた顔のまま尋ねる。

「さあな。俺は知らない。というか、どういう原理か全く分かってないんだ。吸血行為と似ているらしいが、吸うのと入れるのでは

勝手が違つんだろ」

何だが投げやりな気もするが、随分と昔のことであることと、リックが吸血鬼でないことを加味すれば仕方がないのかもしれない。

「ふうん。……じゃあこれがたぶん最後の質問。どうして俺の復讐相手がまだ生きてるって分かつたんだ？」

「ああ、それね。今の時代、対象にされる吸血鬼なんてほとんどいないもんなんだ。で、そのほとんどいなかにお前の復讐相手がいるわけ。俺たちハンターは常に、対象の人相や背格好、名前、大体どの辺りで目撃されたかなんてのを把握してる。もちろん、始末されればその情報も入ってくる。だがこの半年間、対象が始末されたつてのは全く聞いてない」

つまりは、まだ生きている、と。

「集会所にある情報と、お前の記憶と照らし合わせれば、そいつがすぐに誰か、最近はどこにいたかが分かる。だから今、そこに向かつてるんだな、実は」

全く考えなしに歩いてるかと思いきや、どうやらそうではなかったようだ。

「さて、そろそろ街だ。最後に一つだけ言っておくことがある」
木々の切れ目が彼には見えているのだらう。サブレにはさっぱりだが。

「お前はハンターになる理由が理由だから心配ないかもしれないが、いいか、間違つても吸血鬼になろうとするな」

「なっ！ なるわけないだろ！ 俺が！」

大声で反論するサブレに、安心したような表情を見せた。

「それでいい。……たまにな、いるんだ。吸血鬼になれば力が対等になるって、血を飲む奴が。だけどそれは、今までの人生全てを捨てる行為だ」

どこか怒りを滲ませた顔がサブレの目に映る。それは、ここではない、どこか遠くを見ているようでもあった。

「吸血鬼になると、人間であった頃の記憶は消える。なぜ、どうい

う理由で吸血鬼になろうと思ったのか。自分は誰なのか。どこで生まれ、何を見て育ったのか。誰に愛され、誰を愛したのか。全部、失う。全部、なにもかもだ。だから、絶対に、吸血鬼にはなるな」

「ああ、分かった」

深く、強く、首を縦に振った。

リックとサブレが街に着いた頃、ヴァイオレットにあるバーズ家では一騒動が起こっていた。

「もう！ だから早く止めてって言ったじゃない！」

「そんなの、ドロシーが止めればよかった話だろ！」

「ぱぱー、ままー、けんかはらめらって、はるるろさんがー」

夕焼けのように染まった頭が三つ。怒りで赤くなった顔が二つ。ろれつの回らなくなった子どもが一人。

「イアンは黙って寝てなさい！」

「水飲んでからな！」

ソファに寝かされた体を起こし、テーブルに置かれた水を飲む。ソファに倒れ込んだのは、コップを置くのと同時だった。

「あー」

「いつも言ってるでしょ！ 甘やかすところが間違ってるのよ！」

「どこが間違ってるんだ！ イアンは可愛いんだぞ！」

「あの、すいません」

「そんなことは分かり切って、る……あら？」

「何だ？」

やっと第三者の声に気づいたのか、二人そろってドアの方を見やっ

た。

「すいません、鍵が開いていたので、勝手に入って来ちゃいました」

ゆるくウェーブのかかった限りなく金に近い茶髪。腰の辺りまであるそれは、動くたびにふわふわと動く。

「ああ、いいのいいの」

「久しぶりだな、ソフィア。元気にしてたのか？」

色素の薄い真っ白な肌。その頬を少しだけ赤らめて

「お久しぶりです」

嬉しそうに鶯色の目を細めた。

「ところで、イアン君はどうかしたんですか？」

ソファに視線を移して尋ねる。

「血をね、飲み過ぎちゃったの。まだイアンは子どもだから、飲み過ぎると酔っちゃうのよ。それなのにこの人ったら」

「もうその話はいいだろ」

少女と女性の間のような彼女に一人がけソファを勧め、自分もその隣に座る。

「そうなんですか、初めて知りました」

「俺も実際この目で見るのは初めてだな、うん」

「今回はいつまでこっちにいられるの？」

ほんのりと甘いにおいを漂わせたカップが三つ、テーブルに配置される。

「あ、ありがとうございます」

そう言っただけでココアを少し飲んでから

「いつまでかは決めてませんが、次に行く街なら決まっています」

質問に答えた。

「どこに行くの？」

「フィルバートへ。ブライト地方の」

アッシュローズの隣町である。

いつも通りの何もない一日。町の人の手伝いをして、トマトジュースを飲んで、本を読み、アルフに血を与える。そんな日常。そこに予定外の訪問者が現れた。

「ハロルドさーん！」

玄関の扉を開けて叫んでいる。普段は礼儀正しい素直な子だというのに、たまに見せる常識のなさはあの赤毛のせいだろうな。階段を下りながら見えたのはあの赤毛そっくりな色で、私を見つけると走り寄ってきた。

「どうしたんだ、イアン。一人なのか？」

彼の後に続いて入ってくるかと思えば、誰もいない。不思議に思っ
て聞いてみると、考えもしなかった答えが返ってきた。

「うん！ 僕、家出してきたの！」

満面の笑みに、一瞬何を言われたのか理解できなかった。

「……それにしてもよくここまで一人で来られたな」

あまりの衝撃に話をそらしてしまう。階段を上りながら楽しそうに笑うその子は本当に家出少年なのだろうか。単に遊びに来たとしても思えない。

「トーンまでの道は知ってたから、そこからとにかく北に走れば知ってる道に出ると思って走ってたら、ちゃんと近くまで来られたんだ」

まるで親にほめられるのを待つ子どものように、私は無意識的にイアンの頭をなでていた。

「迷子にならなくてよかった」

小さな声で呟いて、さっきまでいた談話室の扉を開けた。

「アルフ」

短く呼べば、イスに座ったままこちらを向いた。しかし来客とわかると、慌てて立ち上がり、今まで読んでいた本をイスの上に置く。

「失礼いたしました！ 初めまして、この間の冬からマスターにお世話になっているアルフです」

「えっと、初めまして！ 僕はハロルドさんの友達の息子でイアン・バースつていいいます」

お互いよろしく、と微笑みあう姿を見て「満点」とか思ってしまった私はもう立派な親ばかだと思う。子どももいないのに。

「さあ、外でも屋敷の中でも、好きところで遊んでおいで」

そう言つて、まだぎこちなさの見える二人を扉の外へ追いやつた。

イアンは終始笑顔だったが、アルフは少し不安そうな表情で私を見ていた。リックだけではなく、同年代の友人もいた方がいいだろうというお節介な理由で、

「大丈夫だ、行つてきなさい」

そのままイアンに連れ出してもらつた。できるだけの優しい声と笑顔で送り出すと、いくらか表情が和らいだように見えた。きつとイアンなら大丈夫だ。心の中でそう呟き、遠ざかる足音を聞きながら、アルフが座つていた場所に腰掛けた。

談話室を出た僕たち二人は、屋敷探検という名の散歩にくりだした。隣でにこやかに笑う彼は、名前と髪色から察するに、あの冬の日に来た人の息子だろう。リックさんとは別の、マスターの友人だ。忘れるはずもないあの日のこと。でも、あの人の息子だというのに、警戒していることが馬鹿らしくなるくらい笑顔の僕に向けてくる。否定しないのだろうか。

「一人で来るのは初めてだから、色々見て回れて楽しいな」

見た目は僕と同じくらいだけど、きつと僕よりずっと長く生きている。吸血鬼の年齢換算はよく分からないけど。そしてコウモリである僕は、従者になった時点でこれ以上成長することがないから、彼だけ大きくなつていくんだろうな。

「あの、今日はどうしてこちらに？」

聞くに聞けなかつたことを口にしてみた。

「僕ね、家出してきたの！」

思いもよらない答えが。

「では、ご家族には内緒ですか？」

「そうだよ！ 内緒って何だか素敵だよね」

このことをマスターはご存じなのだろうか。いや、たぶん来てすぐに理由を聞いたに違いない。今ごろこの子の父親にコウモリを飛ばしているはずだ。

「ところで、アルフ君って」

「あ、僕のこととはどうぞアルフ、とお呼びください」

「わかった！ じゃあアルフも僕のことにはイアンって呼んでね。あと、普通にしゃべってよ。何だかくすぐったいから」

どこか照れたようにお願いされる。

「それはできません」

だって、僕は。

「どうして？」

無邪気な顔が僕を見る。精神年齢っていうのは、やっぱり見た目と比例して成長していくもののかな。

「どうしてって、僕は……コウモリですから。それに」

「えー、そんなの気にしないよ？」

「それに、僕の方がずっと年下です」

コウモリだということにはどうやら気づいていたらしい。一体どこで気がつくんだろう。

「僕、ハロルドさんにも普通にしゃべってるよ？」

「それは、マスターの友人の息子さんですから」

「だったら僕たちも友達になればいいんだよ！ ね、そうしよう！

なんだ簡単なことじゃない」

始めからそうすればよかったと大はしゃぎしている彼の前で、僕は何も言えなくなっていた。

「もう決まりだからね！ 行こう、アルフ！」

あの人のことはあまり知らないけれど、多少強引なところは親譲り

なのかもしれない。でも、それでも僕は嬉しかった。

「ありがとう、イアン」

聞こえなかったかもしれないけれど、僕が言いたかったただけだからいい。ありがとう。

外はともかく、屋敷の中は静かなので、よく声も響く。どこからか聞こえてくる元気な声に、仲良くやっているようだ嬉しくなった。さて。窓を開けてコウモリを呼ぶ。アルフ以外を使うのは久しぶりだな。というか、あの子が来てからは初めてのことが。

夜になり、外も静かになる。イアンにはトマトジュースを出してやった。街の人たちに頼めば血をくれたとは思うが、何となくそれはしたくなかった。それに、血を飲まないからって死ぬことはない。

「イアン」

「なあに、ハロルドさん」

二人は、どこから出てきたのか、ボードゲームで遊んでいる。

「ドロシーにここにいることを伝えておいた」

「え！」

私を非難するような表情を二人してしているのが、さみしくもあり嬉しくもあった。

「大丈夫。今日も明日もいたらいい。好きなときに帰りなさい。ライナスがうるさいだろうが、ドロシーが何とかしてくれるだろう」

そう言うと、彼らは目を見合わせ、一気に表情をほじけさせた。ものすごく喜んでいるのが見て取れる。脳裏にライナスの状態を思い浮かべながら、私は微笑んで二人を見ていた。さて、いつまで我慢できるだろうかあの男は。

あの後、ドロシーから「息子をよろしく」との伝言が来たつきり、バース家からの接触はなかった。イアンも、特に寂しがる様子もなく、毎日アルフと遊び回っている。まあしかし、そろそろ家が恋しくなってくる頃だろうな。

そんなある日。

「ハロルドさん」

「マスター」

玄関の方から二人が私を呼ぶ声が聞こえてきた。談話室からのそり
と出て行くと、どうやらお客が来たようで、二人以外の声がする。
ライナスではないな。あいつが来るともつと騒がしくなるだろうか
ら。

「あ！ 来た来た！」

笑顔でこちらを振り返ったイアンの隣にいたのは、見覚えのありす
ぎる顔だった。

「お久しぶりです」

イアンとアルフと私、とここまでくれば何ら違和感のない顔ぶれ
だが、そこに彼女が加わると、なぜだか一気に奇妙にみえてくる。
談話室に招いてから、ふとそんなことを思った。彼女に三人掛けの
ソファをすすめ、私は向かいにある同じ形のそれに座る。いつもは
その後ろで立ったままのアルフだが、今日はイアンと一緒に一人用
のソファに腰掛けていた。少し大きめとはいえ、それは窮屈じゃな
いだろうか。

「お久しぶりです、ハロルドさん」

再びそう言った彼女は大きな丸い目を少しだけ細めて、きれいに微
笑んだ。

「ああ、久しぶりだな、ソフィア」

ソフィアは吸血鬼だ。かわいらしいともきれいともとれる顔立ちで、
ふわふわとした髪は、風もないのに揺れているように感じる。

「今はこの村の隣、フィルバートに滞在しています。それで、
少し余裕ができたので寄ってみました」

「旅をされているんですか？」

アルフが尋ねた。人見知りには徐々になくなってきているようだ。そ
れとも、イアンのおかげか。

「ええ。絵を描きながらね。楽しいのよ?」

旅先の思い出を聞く限りでは本当にいつも楽しそうだ。

「街にいる間は住み込みで働いたりして、で、働いてる間も暇を見つけては絵を描いてる。そんな生活なの」

「その絵は売らないんですか?」

「売ってるんだけどね、中々買い手がいないのよ。……主にハロルドさんしか」

困ったように彼女が言うと、一人掛けのソファから四つの瞳がこちらに向けられた。

「いつもありがとございます」

座りながらだが、深々とお礼を言われる。

「こちらこそいつもいい物をありがとうございます」

寂れたこの屋敷がどこか明るく感じるのは、そこかしこに掛けられた彼女から買った絵のおかげだ。

しばらく談笑を続けていると、ドアを叩く音が、ゆっくりだが確かに屋敷中に響き渡った。

「あ、僕が見てきます」

すばやく立ち上がるアルフ。私の知り合いだったら、きっとそのままここに連れてきてくれるはずだ。

「頼む」

「じゃあ僕はソフィアと遊んでくる! ね、いいでしょ?」

遊び相手に誘われるのはいつものことなのだろう。快い返事を聞くと、イアンはソフィアを連れ立って出て行った。……あつと言つ間に一人になってしまった。遠くの方で様々な音が聞こえるが、静かだと感じる。今日はよく客の来る日だが、一体今度は誰だったのか。

10 むかしばなし

私はその頃すでに吸血鬼で、彼女はただの町娘　そう、人間だった頃の話だ。私たちが恋に落ちるのに、さほど時間はかからなかった。ずっと昔からそうしてきたように、一日の長い時間を二人で過ごした。暖かな春の日差しも二人で浴び、暑い夏の日には川沿いの木陰で眠った。枯れ葉舞い散る中、肩を寄せ合って歩いたし、雪の降るような寒い寒い日は暖炉の前で一晩明かしたりもした。幸せだった。幸せ、だった。

扉を開けて入ってきたのは、アルフと友人と、見知らぬ少女だった。肩ほどまでのソフィアより濃い茶髪を二つに結んだ様は、きれいな顔立ちを幼くさせ、歳相応に見せていた。きつと十より少しばかり上だろう。

「ありがとう、アルフ」

礼を言いながら立ち上がり、客人にソファを勧める。

「アルベルトは久しぶりだな。ところで、そちらのお嬢さんは？」

見ない顔だが、恋人かな？」

ほんのりと赤くなった頬が肯定を示した。

「初めまして、リリーです」

そう名乗る声は透き通っていて、見た目通りの印象を受ける。

「えっと、ハロルドさんですよ？　アルの友達の」

「ああそうだ。初めましてリリー、私は知っての通りハロルド・オールコック。よろしく」

彼女はそれに対してにっこりと笑顔を作り、

「こちらこそよろしく願います」

と言った。まだ幼い、純粋な子どもだ。アルベルトとは違う。彼は見た目こそまだ大人になりきれしていないが、すでに三十年以上の時を過ごしている。

「私、アルの友達に会うのって初めてで。今日こちらに伺うって聞いて、すつごく楽しみにして来たんです」

華やかな顔を向けられるが、少し、心苦しかった。彼女はきっと知らないだろう。なぜ、アルベルトが友人に会わせないのかを。

「ハロルドさんも吸血鬼なんですか？」

「そうだよ。……君は、人間、だね？」

ならどうして私の所に連れてきたのだろう。それほどまでに苦しいような顔をして。何が欲しかったのだろう。

「？ ええ」

確認するまでもなく分かっていたことだ。きっとアルフも気づいていただろう。その問いに、リリーは疑問符を浮かべながらも答えてくれた。そんなことを聞く理由がわからなかったのかもしれない。吸血鬼か、と聞くならまだしも。

「……アルベルト」

「ハロルドさんも同じなんですか！」

今までリリーに向けていた視線を、彼に移した。悲痛な声と顔。突然の大きな声に、後ろでアルフがおろおろとしているのが心配で分かる。リリーも驚いているようだ。

「みんな、僕たちのことを心配という言葉を盾にして否定します」

「そうだろうね」

彼らは人間と吸血鬼だ。

「ハロルドさんもそうなんですか？ 僕たちを否定するんですか？」

ハロルドさんならそんなことしないって思ってたのに！」

二度目の訪問者は、同じくマスターの友人だった。そして彼は今、泣き出しそうに叫んでいる。隣にいる彼女が人間であることは、僕の目にも明らかで、彼の周りの吸血鬼たちが二人に対して何を言うかも、安易に想像できた。

「どうして人間を愛しちゃいけないの？ リリーなしではもう、僕は生きていけない。こんなにもおいしい血が、それを証明してる」

愛する人の血は、極上の味がするんだとどこかで聞いたことがある。勢いをなくし、誰に向けてかも分からない言葉を吐き出す彼を、心配そうにのぞき込む隣の少女。マスターが、ゆっくりと口を開いた。「だめだ、とは言わない。だが」

「嫌です！」

「アルベルト、何度言われたか知らないが、聞きなさい」

「嫌です！ ハロルドさんならって思ってたのに。昔、人間の恋人がいたって言うてたから」

初耳だ。僕の知らないマスターは、まだそこらじゅうに転がっている。

「そんなハロルドさんなら、僕とリリーのことを分かってくれてっ
て信じてたのに！」

「ちよつと待て。その話は誰から聞いたんだ。私はお前に話した覚えがないぞ」

「イアンの、お母さんから。……でもそんなこと今は」

「どうでもよくない！」

マスターがこんな声大きくさせるなんて。初めてのことだらけで、僕の頭は混乱している。でも、一つとして聞き逃したくなかった。

「ドロシーは本当におしゃべりだな。しかも中途半端に話して、よい話がややこしくなる」

「昔つてことは、その人は亡くなったんですか？ だから僕にもそうならないようにって言うんですか？」

矢継ぎ早に話す彼の声に混じって、この場にそぐわない声が屋敷のどこからか聞こえてくる。何だか楽しそうだ。

「違う。そういうことじゃない。第一、彼女はまだ生きている。お前もよく知っているはずだ」

「え？ 僕、人間の知り合いなんて」

優しさと切なさや悲しさと、他にも色んな感情を混ぜ込んだ表情をしたマスターが立ち上がり、向かった先は窓際。隣に立って見下ろ

すと、そこには

「まさか」

イアンと、ソフィアさんがいた。驚いて隣を見上げると、僕のつぶやきを肯定するようにマスターが頷いた。

「ソフィアさん……？ でも、彼女は吸血鬼のはずじゃ」

アルベルトさんの声を聞きながら、僕は庭に咲いた花々で遊んでいる二人を見ていた。

「そうだよ。ソフィアは吸血鬼で私の友人だ。でも、昔は人間だったし、恋人だった」

「どうして。吸血鬼になつて血が吸えなくなつたからですか？」

マスターはソファには戻らず、その場に立つたまま話を続ける。

「吸血鬼の間でタブーとされていることがいくつもあるな。さっきお前が言ったことにも繋がる、人間以外の血を吸血してはならないというのもその一つだ。そして、吸血鬼ハンターに殺される要因にもなりうる、不用意に吸血鬼を増やしてはいけない、これもそうだ」
「コウモリの僕よりは吸血鬼のことを知っているだろうアルベルトさんも、真剣にマスターの話に耳を傾けている。人間であるリリーさんはなおのこと。」

「じゃあなぜ、吸血鬼を増やすことがタブーなのか知っているか？」

「生まれたときからそういうもの、と聞かされてきたので……」

「どうやらアルベルトさんは理由を知らないらしい。」

「吸血鬼になると、人間だった頃の記憶を失うんだ」

息をのむ音がかすかに聞こえた。

「じゃあ、ソフィアさんは……」

「もちろん、私と恋人同士だったことなど知らない」

忘れる、じゃなくて失う。覚えていないわけじゃなくて、知らない。失った物を「思い出す」ことなんてできないから。

「さて、話が長くなりそうだな。アルフ、トマトジュースを頼む。」

二人もそれでいいか？」

それに頷いてくれたからよかつたものの、この屋敷にはトマトジュ

―ス以外の飲み物なんてないに等しい。

僕はマスターに頼まれて、部屋を後にする。どうか僕が戻るまで、話の続きはしないでくださいね。ぱたぱたと廊下を走りながらそう願った。頭の中はあれからごちゃごちゃとしたままだ。

ちょうどその頃、トーンから一つ西へ行った街に彼らはいた。せわしなく走り回る店員達に、楽しそうに談笑を繰り広げる客。小さなめだが、かなり繁盛していて賑やかな食堂だ。

「あまり人に聞かれたくない話をするときは、これぐらい騒がしい場所がいいんだ」

リックが運ばれてきた料理をさっそくつまみながら自慢げに言う。

「てことは、今からそんな話をするのか？」

「名乗ることを理不尽に禁止されたままじゃ納得いかないだろ？」

特別に理由を教えてやるよ」

「かなり深刻そうな理由だが、俺が聞いてもいいのか？」

殺されかけたときのことを思い出しているのだろう。聞きたいが安易に聞いてはいけないような気がして、自分に関わることだというのに遠慮がちに尋ねる。

「いいさ。あれから十年経った。そろそろあいつも、自分の口から話せるくらいには気持ちに整理がついてるはずだ」

だからいいのだと言う。

「じゃあ聞かせてくれ」

ここですよやくサブレは食事に手をつけた。

「十年前、ハロルドがビビッド地方のキャナリーに住んでいたときの話だ。あそこは冬も暖かくていいところだぞ。で、その人間の娘とハロルドは恋に落ち、愛し合うようになった。これがそもそも始まりだ」

ゆっくりと語り始めた。

「女の名前はソフィア。これがまたきれいな娘なんだ。今度紹介してやるよ」

ところどころ私情を交えながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9531i/>

吸血鬼の住む町

2011年11月16日20時41分発行